



大方あかつき館報

第13号
2006年3月発行

あかつき

「出会い、そして……」

作家 門脇照男

讃岐山脈さぬきさんみづのふもとにある山の湯は、家から近い。月に何度かは、その湯に漬かりに行く。南向きのガラス窓からは、なだらかな山並みが見え、国道を走る車や列車が、ゆつくりと山壁を縫いながら行くのも見える。あの列車に揺られて行くと、四時間ほどで上林さんのふる里へ行けるのだいつも思う。

目の前にあるその山を登りつめた所に、猪ノ鼻峠があり、峠を越えると徳島県の池田町だ。猪ノ鼻というだけあって、この山にはイノシシがいる。猿もいる。山の畑へ柿やミカンや芋を作っている人は、その被害に会って困っている。

湯に漬かりながら聞くそんな農家の人の話では、猿に石を投げると逆に木の上の猿が、男めがけて、ちぎった柿など投げつけてくるのだそうだ。

湯の中で、窓から見えるそんな風景を眺めながら、私は、同じ四国の南の果てに生まれた上林さんのことを、ぼんやりと思っている。もう遙かな昔になってしまったが、上林さんの本に出会ったのは、昭和二十二年の暮れのことだった。何か小学校の教材でも探そうと、自転車を踏んで一時間、町の本屋へ行った。戦後間もなくで、薄暗い本屋の棚には、少しの本が並んでいた。

その時、ふと一冊の本が目にとまった。本の背に『文学の歓びと苦しみについて』とあり、その下に「上林暁 感想評論集」とあった。出たばかりの本のようで、昭和廿二年十一月十日発行とある。そんな本が、こんな田舎の本屋にあったのだ。

海軍から復員したての私は、文学とは何かよく分からなかったし、上林暁という名も知らなかった。が、この本は、ともかく「歓びと苦しみ」のことが書かれているのだと思った。その頃の私は、これから自分がどう生きてゆけばいいのかと、毎日悩んでいた。

その夜は、明け方までその本を読んだ。そこには、「私小説の新意義」とか、「表現への執着」「東京にありて」「純文学のために」など、戦時下にあつて「文学」という一つのこと命をかけている一人の男の姿があつた。それを読みながら、「文学」とはこういうものだつたのか、と目の醒めるような思いがした。東京へ行きたい、と思った。そして自分も、この人のように、どんなに苦しくてもその「文学」というものをやろうと思った。その思いは次第に高まり、遂に夜逃げのようにして東京へ行った。昭和二十三年の春だった。

『文学の歓びと苦しみについて』―、この一冊の本に出会わなければ、私は「文学」などという魔界をさまようことはなかったろう、と今も思う。

魔界―、やはりそうなのだ。そして今も、私はか細い文学の明りを灯し続けている。が、私の場合それは、日陰に咲いたやくぎで隠微な花のようなものだった。そんな花などない方が、世の中は明るくなり、健全にもなるだろう。だが、そんな花を自分でもいとおしみ、慰撫しているという不思議な思いがある。上林さんの言うように、梢に咲いている花よりも、地に散っている花を美しいと思うのだ。

その美しさこそが、私の好きな川端康成のころであり、文学というものではなからうか。

昭和二十三年の春、上京した私は、阿佐ヶ谷にある義伯父の家に仮寓した。上林暁という作家に会いたいと思った。はじめて、天沼に住む上林さんのお宅へ行ったのは、四月の半ばであつたろう。歩いて二十分ほどの距離だつた。

お宅の前へ行き、門札に「上林暁・徳廣巖城」とあるのをたしかめた。その時不意に、家の中で何かを洗っている水の音がした。とたんに私は家の中へ入る勇気をなくして、すぐごと引き返した。あの時の水の音は、今もありありと思いおこすことができる。

それから何日かたって、今度は勇気を出してお宅の前へ行った。その時は、徹夜して書いた「送別会」という三十枚ほどの小説を持って行った。

部屋に通されて、はじめて上林暁という小説家に会った。上林さんは、私の「送別会」を書棚の上に置いた。が、それはそのまま、いつまでもそこにあつた。

妹の睦子さんにも、その時はじめてお会いした。その時写したのであろうと思う、お二人がちよこんと式台の上へ並んだ写真が、色褪せながら今も私の手もとにある。

あれからもう六十年になる。が、上林さんや睦子さんとの思い出は尽きない。茫茫と過ぎ去った時の流れの中で、上林暁という作家にめぐり会えた歓びのなかに、今の私はいる。

「付された最後の一文」

関西学院大学大学院研究員 本田有加子

それは、錆びたホッチキスの芯で束ねられていた。ひっそりと時を重ね、焼けてしまった原稿用紙は捲るたびにヒラヒラと破片が舞い、その都度指先は震えた。紙の上に踊る文字は不均一で、判読すら困難なものもある。初めて触れる作家の生原稿の前に、胸の高まりは止まることがなかった。一通り中身を確認してから、緊張を和らげる為に一枚目の文字を指で丁寧になぞった。これが、「Y・Y氏と私」、上林暁の全集未収録未発表原稿との出会いである。

そもそも、上林暁と私の出会いは、第八号から原稿入力に携わるようになった「上林暁研究」誌を介してのことになる。その過程の中で様々な「上林暁」に触れ得ることになった訳だが、最初に任された仕事が、研究誌第九号に掲載された前述の、「Y・Y氏と私」の原稿入力であった。作家の生原稿を手にしなから、まだ数人の目にしか触れられていない作品を掲載へと仕上げていく作業は、想像以上に刺激的なことである。

改めて言うまでもなく、上林が半身不随で寝たきりとなって以後、左手で書かれた作品は妹の睦子氏の手によって清書された。そのことは、睦子氏著書の『兄の左手』（筑摩書房／一九八二・八）に詳しいが、「Y・Y氏と私」も無論例外ではない。左手の原稿は、

私のようなものが幾ら目を皿のようにして読もうとしても判読できない文字で書き連ねられている箇所がままあつた。当然ながら、作業は上林の左手による原稿、睦子氏の清書とを並べて進めていくことになった訳だが、いよいよ最後の一枚、となった時である。研究誌の編集責任者でもある吉村稠氏から「待つた」が入ったのである。私は初めての作業に精一杯でその時まで気が付かなかったのだが、左手の原稿と睦子氏の清書とでは、最後の部分に明らかな違いがあつたのである。それは、原稿にはない「一文」の存在、である。やや推理小説めいた書き方をしたが、まずは少しく「Y・Y氏と私」の梗概を述べておきたい。

「Y・Y氏と私」は、睦子氏の日記から確認するに、上林が半身不随となつて十二年、昭和四十九年に書かれた作品である。「文壇の長老Y・Y氏は、今年一月中旬にみまかつた。行年、八十五才。」という一文から始まる冒頭では、「Y・Y氏の立派さ」を物語るエピソードが紹介される。しかし、「Y・Y氏」を「国民的作家」と評しながらも、それを物語る「私」の口調は批判に満ちたものである。そもそも、二人の関係は作中語られているように、「改造社」を通しての「作者と編集者との関係」であつた。参考までに述べると、上林の改造社在職は昭和二年から同十年までである（「上林暁年譜」『上林暁全集第十九巻』所収 筑摩書房／二〇〇一・十二）。「たつた一回きり」会つただけの「Y・Y氏」から受けた「不愉快な印象」は「私」の中に根深く残り、それゆえ氏に呈する言葉

は「ほめる気にはならない」「けいべつする」というような、非難の明言でもって語られているのであろう。それはかつて、氏の戯曲を読んで涙を流したことをも、「取返しのないこと」であると言うほどに、徹底した批判の姿勢である。「私」の言葉を借りれば、まさに「恨み、骨髄に徹する思ひ」なのである。この不愉快な印象は、軽井沢で出会って以後、何年もの間、編集者として訪ねたのにも関わらず、それが報われなかったことにつきる。ただの一度しか家に上げてもらえなかった上、その時、一介の編集者に過ぎぬ自分が「編集長」として他人に紹介されたこと、挙句の果てには、通い詰めた自分を素通りして上司に原稿が手渡され「手柄」を取り損ねたこと、それら全てが、「Y・Y氏」から受けた「恥づかしめ」として記憶され、「今日まで忘れることが出来ない」「恨み」の作家として、「私」に受け止められているのである。この、「Y・Y氏」こそ、『路傍の石』や『真実一路』で知られる山本有三に他ならない。奇しくも、「私」が氏を「文壇の長老」と記しているように、当時、山本有三は名声を博していた。そうした中で、この作品である。イニシャルとは言え、容易に山本有三と推測される人物に対する非難めいた内容とあっては、掲載にかなりの決断が要されたであろうことは想像に難くない。

実は、ここで左手の原稿と睦子氏の清書の違いが問題となってくるのである。作品は、「結局、Y・Y氏は私にとつて恨みの作家であると同時に、なつかしい作家である。」と

閉じられるのだが、これは上林の左手原稿には存在しない。この一文があるのは、睦子氏の清書原稿のみであり、不思議なことには、その一文が睦子氏の筆跡ではないということである。第三者によって書き加えられたそれが誰の手によるものなのか、と言うと、まずまず推理小説めいてきたが、以下、私が聞き知った内容を記して謎解きとしたい。結論から言えば、それは前「新潮」編集長であった前田達夫氏によって加えられた可能性が高い、ということである。と言うのも、「Y・Y氏と私」が収録された、研究誌第九号の「付記」に記されているように、この作品は元々「依頼原稿」であった。そのため、担当していた前田氏は眼を通した段階で、山本有三に対する辛辣なまでの批判を帯びた内容を懸念し、上林との話合いの中で、「こういう風にされてはどうでしょうか」というやり取りを交わしたそうなのである。その過程の中で前田氏が書き加えたかもしれない、と言うのだが、何分、昔のことであり、そのいきさつに関する前田氏や睦子氏の記憶は曖昧である。ただ、それでも揺るぎ様のない事実がそこにはある。それは、上林の左手原稿には、文末に付された一文は存在しない、という動かしようのない事実である。

そのようないきさつがあったものの、結局、作品は未発表となり、研究誌に於いて日の目を見ることになったのは周知の通りである。

「Y・Y氏と私」は、総じて「Y・Y氏」に対する語気を強めた口調で占められている。だが、作品はその一面に留まらない。「恨み、

骨髄に徹する思ひ」を口にしながらも、長い歳月を経て「Y・Y氏」を語る「私」は、氏に対して「なつかしさ」をも抱いているのである。それは、「私」もまた「Y・Y氏」と同じく「死」の接近を感じる年齢であることと無縁ではないだろう。だからこそ、「昔の恨みが、消え去つたわけではなかったけれど、Y・Y氏が死んだとなれば、やはりなつかしさが先に立つのだった。」と、「死」を重ねて述べられるのである。かように、あえて作品末尾の一文はなくとも、年齢を重ねた「私」が複雑な思いを抱きながら「Y・Y氏」を語るころに作品の味わいがあるように思うのだが、果たして他の読者はどう感じるであろうか。

昨今の「上林暁」を巡る動きは緩やかではありながら、確実に変化を見せ始めている。

「上林暁研究会」の発足、そして上林を「私小説作家」もしくは、ある固定された読みから解き放とうとする論考の出現、である。上林「私小説作家」という記号性の強さは、これまで良きにつけ悪しきにつけその評価を固定してきた観は否定できないだろう。しかし、上林暁を語るといふ面から言えば、今後更に求められるのは、「上林暁」を相対化させていく作業である。また、全集未収録の作品も多くあり、落穂拾いのような作業の綿密さも今後は必要となってくるであろう。語られることのなかった「上林暁」を語ること、その場としての一翼を、「上林暁研究」誌は担っているのである。

そして今春、「上林暁研究」誌は第十四号を数える。



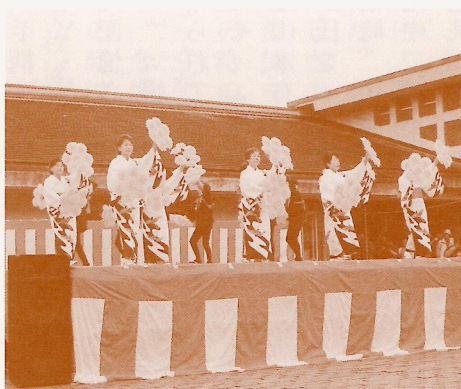
昨年の催し風景

第43回 大方の秋まつり

11月12日～13日

場所 ふるさと総合センター・大方あかつき館

大方町としては最後の秋祭りが開催されました。今年はお天気にもめぐまれ、3,500人ももの入場者がありました。あかつき館では美術展が行われ、一般の方および大方高校美術部から絵画の出展がありました。特設舞台では軽音楽・吹奏楽の演奏や舞台芸能、総合センター内での町展や室内展示、お祭り広場での各種コーナーの販売等盛大に行われました。同時開催の健康ウォークも盛況でした。



図書館フェアの開催について

12月25日にマトリョミンの演奏会が行われました。今回は、名古屋より演奏者の高扶美枝さんにおいでいただいて、電子楽器のすばらしい音色を聞かせていただきました。演奏後、マトリョミンに実際に触れたり音の出し方を習ったりして、楽しい時を過ごしました。

また、町民ギャラリーでは12月25日～1月22日までロシア絵本展が行われました。ロシアのめずらしい小物や民俗人形のマトリョーシカ等の展示が行われ、興味のある方が熱心に見ていました。



大方シーサイドはだしマラソン 全国大会のお知らせ

と き 2006年5月3日(水)
憲法記念日 雨天決行
と ころ 高知県幡多郡黒潮町
入野海岸
受 付 8:00～9:00
スタート 10:30

※みなさん応援にご参加ください。

編集後記

2006年3月20日に大方町と佐賀町が合併して**黒潮町**がスタートしました。**大方あかつき館**の名称はそのままです。尚、図書館は

◆黒潮町立大方図書館

◆黒潮町立佐賀図書館

の2ヶ所となりました。貸出・返却どちらでも可能ですので、ご利用をお待ちしています。